

学校通信

陽光



令和4年度卒業おめでとう号
多可町立八千代中学校
令和5年3月15日（水）発行
<https://www.town.taka.lg.jp/yachiyo-jr-hi/>
電話 37-0049 文責：校長 神崎



卒業式式辞（抜粋）

学校長 神崎進吾



入学当初から学校生活は様々な制約がありました。野外活動や体育祭、文化祭など、たくさんの学校行事が中止になったり、制限のある活動になったりと、それまで当たり前であった学校生活を奪われる未曾有の経験をしました。しかし、そんな中でも、皆さんは、今できること、今やるべきことに真摯に取り組み、一生懸命ひたおきに活動しました。皆さんのその姿は、後輩たちの良き手本となるものでした。皆さんには、私たちの心を引きつける、たくましさとしなやかさ、そして、何より底抜けの明るさと元気の良さがありました。

皆さんが、学年の目標である「自律」のもと、自分たちの生活を自分たちの手で創り上げてきた姿が、何といても印象に残っています。

二年生では、学年行事として行った「学年体育祭」や「天橋立フィールドワーク」をリーダーが中心となり、計画、運営していきました。また「トライやるウィーク」の製作発表会での「なか・やちよの森公園」を盛り上げるためのアイデアは、公園の局長さんも舌を巻くものばかりでした。そして、その集大成が3年生の「修学旅行」でした。そのプログラムを自分たちで一から創り上げ、見事やり遂げました。

また、皆さんの最上級生としての活躍ぶりも素晴らしいものでした。本校伝統の生徒主体の活動を継承し、発展させてくれた生徒会。「八中ルール検討会」を開催し、自分たちの学校生活のルールやマナーの見直しを図ってくれたことは、この八千代中に確かな足跡を残してくれました。その生徒会を中心に、「颯爽～Let's catch our victory～」のスローガンの下、大成功を成し遂げた体育祭。そして「謳歌（おうか）」のスローガンのとおり、みんなが心を一つにし、大いに歌声と心を響かせあった文化祭。校訓の「全校一心」を体現し、皆に感動を与えてくれました。本当によくやり切りました。

そして、今、皆さんは期待に応え、一人ひとりが持てる力を十分発揮し、義務教育九年間の総まとめにふさわしい生徒に成長しました。今、コロナ禍という困難を乗り越え、人生の大切な節目である「卒業」を迎えた皆さんへのはなむけに、お話をします。

それは本校の卒業生であるプロ野球選手、読売ジャイアンツの翁田大勢選手のお話です。皆さんもご承知のとおり、大勢選手といえば、入団一年目にしてピッチャーとして37セーブを上げて見事、セ・リーグの新人王に輝き、今、開催されているWBC（ワールドベースボールクラシック）にも選出される等、大活躍を見せて来ています。

その大勢選手が先日の「三年生を送る会」で、卒業生の皆さんのために、お祝いのメッセージ動画を送っていただきました。

彼はそのメッセージ動画の中で、こんなことを言っていました。「コロナの影響もあり、なかなか思うようにいかなかった三年間だったと思いますが、その時間も本当にかげがえのない時間になったと思います。僕もプロ野球選手になってか



らも、地元の中学校からの友だちは本当に大切にしていますし、試合も見に来てくれたりと、本当に心の支えになっています。ですので、この中学校で出会った友だちをこれからも大切にしてほしいと思っています。これからそれぞれの道に進んでいくと思います。その中でうまくいかないこともあると思いますが、そんな時こそ中学校の友だちと励ましあってください。僕も頑張ります。お互い頑張りましょう。」

私はこの大勢選手の言葉を受け、皆さんに次の三つのメッセージを送りたいと思います。

一つ目は、「『夢』や『志』に向かって、困難から逃げずに努力を続けてほしい」ということです。

プロ野球選手になるという夢を叶え、大活躍している大勢選手ですが、最初から順調だった訳ではありません。西脇工業高校に在籍していた高校三年生の時は、最高成績は兵庫県大会ベスト16。甲子園出場の経験はありません。秋にプロ野球志望届を提出しましたが、どの球団からも指名されませんでした。進学した関西国際大学でも、三回生秋から四回生春という重要な時期に、右肘の疲労骨折で、投げることすらできない状況に追い込まれました。一時はプロはおろか、大学野球まで終わりがねない状況でした。厳しい状況に立たされても、なぜプロを目指そうと思えたのか。彼は雑誌のインタビューでこう答えています。「小さい頃にプロ野球を見に行き、選手がかっこよくて『プロになりたい』と決めました。あきらめられなくて、あきらめたくなくて。自分なりに練習して、常に目指していたものでした。」



そんな想いを胸に、トレーナーとともに、地道な体幹トレーニングや筋力トレーニング、体に負担のかからない新しいフォーム改造に取り組み続けたのです。そして、やっと4回生秋の大会で復帰。肉体改造とフォーム改造の成果が出、球速は自己最速の157キロをマーク。圧巻の投球をみせます。それがスカウトの目にとまり、読売ジャイアンツにドラフト一位指名。全国大会の試合に出場した経験は皆無。ずっと水面に潜り、もがいていた彼の夢がやっと実現したのです。

努力がすべて報われるわけではありません。しかし、成功した人は間違いなく努力をしています。そして、この努力にはコツがあります。それは、目標の設定の仕方です。

「こうなりたい」という理想像をもつことはとても大事なことです。しかし高い目標を掲げ、その目標を達成するためには、日々取り組む小さな目標を設定し、目標達成に向けて努力し続けることが大切なのです。大勢選手の今の活躍を、中学時代の彼の周囲の一体誰が想像したでしょうか。大勢選手も、中学、高校、大学と、そのステージ、ステージで、自分の手の届く小さな目標を立て、日々努力を積み重ね、少しずつ少しずつステップアップし、大きな目標を叶えたと言えるでしょう。皆さんも、自分の「夢」や「志」に向かって目標を小刻みに設定し、困難から逃げず、あきらめることなく努力し続けてください。

二つ目は、「周囲から応援されるような人になってほしい」ということです。

大勢選手は、まさにそんな周囲から応援される人です。学校でも「翁田大勢さんコーナー」を作って、彼の新聞記事を掲示して、応援しています。私が彼にお祝い動画の依頼をした時、まさにWBCに選出され、強化合宿に入ろうかという時期でした。とんでもなく多忙なのはわかっていましたし、野球に集中したい時期であったはずですが、まず、無理だろうかと半分以上諦めつつ、お願いしていました。しかし、忙しい合間をぬって彼は、一週間後にはあのメッセージ動画を届けてくれました。彼の誠実で温かな人柄が伺えます。

どんなことにも誠実にひたむきに、どんな困難や失敗にもくじけずにチャレンジする真摯な生き方をすること。そして、自分のことだけを考えず、周囲の人への思い遣りと感謝の気持ちを忘れず行動すること。そうすれば、周囲の人たちは、あなたのことを自ずと、愛し励まし応援してくれるはずですよ。

それは、その人が成功した時や、何より、うまくいかない時によくわかります。あなたが自分の夢を叶え、成功したとしましょう。その時に、周りから「おめでとう」「本当によく頑張ったな」と、心からの祝福の声があがる。そして何より、あなたが何かに躓き、うまくいわずに落ち込んでいるときに、周りから「大丈夫か?」「何か手伝えることはないか?」と声をかけてもらえる。そんな「周囲から応援される人」になってほしいと思います。

三つ目は、「この八千代、そして多可町は、皆さんのこころのふるさとであることを忘れないでほしい」ということです。



昨年度、大勢選手が多可町役場を表敬訪問した際、教育長から依頼されて、多可町の子ども宛にサインとメッセージをプレゼントしてくれました。しばらく考えて書いたメッセージは『人にやさしく』……。

「夢」や「挑戦」といった言葉でなく、この言葉を選んだことに私は少し驚くとともに、多可町の、そしてこの八千代の出身らしい、とても素敵なメッセージだと思いました。彼はインタビューで、ふるさと多可町について問われ、「自然が豊かで、おいしいご飯もある。

優しくて温かい人ばかりなのが自慢。多可町大好きです。」と答えています。

多可町の良さは、やはりこの町の温かさにあると思います。「人が優しい。町が優しい。」

「環境が人を育てる」とよく言います。幼いころから優しい言動に触れて育った子どもは、優しい人に育ちます。温かい家族、おじいちゃん、おばあちゃん、そして、地域の皆さんのやさしさに包まれて育つからこそ、多可町の子どもはやさしい子どもに育つのだと思います。登下校中、すれ違う地域の方と交わされる挨拶。横断する中学生の自転車を見て停まってくださる車。何気ないことですが、この町の素敵などころです。町外に出て活躍する大勢選手はこの町の温かさを、なおさら強く感じておられるのかもしれない。

皆さんも、これからの人生、荒波に揉まれることもあるでしょう。でも、この多可町で育ち、人の優しさや温かさを知っている皆さんなら大丈夫です。

皆さんの根っこは、この多可町で、この八千代の地で立派に根をはりました。みなさんなら、どんな荒波もきっと乗り越えていけます。この八千代、そして多可町で生まれ、育ったことを誇りに思い、自信を持って胸を張って旅立ってください。



～ 第53回卒業証書授与式 - 44の夢が羽ばたいていきました - ～



「喜びと寂しさ」「笑顔と涙」… 学校は今日、1年で一番優しい1日を迎えました。本日、3月15日(水)、卒業生たちは晴れ晴れとした表情で、笑顔一杯に登校。前日に1年生が校舎内外の清掃、2年生が会場準備を担当しました。卒業生は2年生が飾りつけてくれた教室へ。中学校生活最後の教室。卒業式が始まるまでの少しの間に、友だちや先生と話をしながら楽しく過ごしました。そして、9時30分、「第53回卒業証書授与式」が始まりました。式は終始厳粛な雰囲気で行われ、緊張

しながらも、卒業生は卒業証書をしっかりと受け取りました。この日「送辞」を務めたのは、在校生代表のHさん(現生徒会副会長)、「答辞」を務めたのは、卒業生代表のOさん(旧生徒会長)。2人とも今日までの想いをしっかりと込めた素晴らしいスピーチを披露し、多くの人たちの涙を誘いました。そして、3年ぶりとなる卒業式での全校生による校歌斉唱。心のこもった歌声が体育館に響きました。44名の卒業生のみなさん、感動的な卒業式をありがとう。未来へ大きく羽ばたいてください。

～ 陽光返信欄より(卒業おめでとう特集)～

- ・卒業式用のコサージュが杉原紙を用いたもので、学校のHPで見ると本当にきれいな色で卒業式をより華やかにしてくれそうでした。卒業式に1・2年生が出席するのか分かりませんが、お世話になった先輩方をしっかり祝ってあげてほしいと思います。
- ・3年生の皆さんはもうすぐ卒業ですね。色々とお世話になりありがとうございました。これからも頑張ってください。
- ・3年生のみんなが笑顔で卒業できますように！！3年間ありがとうございました。
- ・陽光に返信するのもこれが最後です。8年間お世話になりました。娘と共に八千代中学校の保護者を卒業です。たくさんの思い出をありがとうございました。
- ・この返信欄を書くのも最後になりました。この3年間は制限の多い生活でしたが、楽しくすごせたのは友達や先生方に恵まれたおかげです。ありがとうございました。
- ・3年間お世話になりありがとうございました。本人も3年間楽しかったと喜んでいます。
- ・兄から引きつづき6年間、八千代中学校にお世話になりました。我が子を通じて、共に悩み、喜び、多くの情熱に染まった6年間でした。主人公が違えば見えてくる「八中」の顔も違い、親として、母として、子のおかげで成長させてもらえたと思っています。私がこの年月を経て学んだ事は、子どもはどんな事でもありのままを受け入れる、順応できる能力を持つこと。私たち大人は、過去や未来を盾にして受け入れられない理由をつい言ってしまいます。子どもの底抜けに素晴らしい適応能力を、私たちが見習うべきだと思うようになりました。「老いては子に従え」「後から生まれた方が上」本当にこの言葉通り、私たちは大人になるにつれて、子どもの頃抱いていた大切なものを心のどこかに失くしていた様に思います。それに気付かせてくれた子どもたち、そして日々、たくさんの事を気にかけて子どもたちを守り抜いて下さる先生方、ありがとうの言葉では足りないくらいの感謝でいっぱいです。ここ八千代で子育てが出来て幸せです。お世話になりました。ありがとうございました。